

横山ゆずり作 **「死と命」**

<前編>

(効果音) (学校のチャイム)

先生 では、今日はここまで。

(効果音) (生徒たちのガヤ)

川島<sup>とおる</sup>徹 おーし、部活だ部活だ。

男子 徹、おれ今日、部活パスするからさあ、悪いけど、先輩には適当に言っといてくれよ。

徹 またかよ。いいけどさ、お前、レギュラーの座はおれがもらったぜ。

男子 調子に乗んな、バーカ。

徹ナレーション おれは、川島徹、青春中学の2年生。学校は、まあ嫌いじゃないけど、どっちかって言えば、授業中より放課後に燃えるタイプ。部活の仲間もクラスのやつも、結構面白いから、割と盛り上がってる。あ、そうそう、クラスって言えば、我が2年B組には、ちょっとしたミステリーがあるんだ。ついこないだも…。

(回想)

生徒(口々に) やだ、ウツソー、信じらんない。／これ、マジで怖いぜ。／違うよ、何でもないって。／ううん、絶対に写ってるって。ほら、ここの白いとこ。／キャー！／光のせいだろ、単なる…

徹 何騒いでるんだよ。どしたの？

男子 あ、川島。ほら見ろよ、これ、こないだの遠足の時の写真。

徹 ああ。へえ、結構よく撮れてるじゃん。

男子 何のん気なこと言ってんだよ。ここ見てみろよ。

徹 お、何だ？ この白くポーっと光ってるみたいな…。

女子 だれかいるよお。絶対、心霊写真だってば！

徹 まさかあ。

男子 いや、あり得るぜ。ほら、星山さんかも…。

女子 そうよ、きっと星山さんよ。あたしたちの遠足についてきたんだよ。

ナレーション 星山さんというのは、おれたちの学校では、ちょっとした伝説になっている男の人だ。生きていればもう30歳をとっくに過ぎていらしいんだけど。そう、星山さんは、もう20年も前に亡くなったんだ。自殺だったそうだ。おれたちと同じ2年B組で、何でもすごい秀才で、高値高校合格確実と言われていたのが、中2の終わりに、突然、自らの命を絶ったという。それ以来、毎年、2年B組には、必ず星山さんの霊が現れると言い継がれてきたのだ。おれたちは怖がりながらも、この人に妙な親近感すら抱いていた。

女子 やっぱり、本当にいたんだ、星山さん。

男子 バーカ。何感動してんだよ。

女子 だってさ、星山さんって、成績優秀、みんなからの信頼も厚かったっていうじゃない。遺書にも、自殺に理由は、はっきりとは書いてなかったでしょ？ なんかきつと、すごくナイーブな人でさあ、凡人には分かんない深い苦悩があったのよ。

男子 そうかねえ。好きな女の子にでもフラれたんじゃないの？

女子 あんたたちとは違うの。とにかく、死を選ぶほどの悩みだったんだから。

徹 自殺するのが、そんなに偉いかなあ。

女子 別に偉いってわけじゃないけど、

男子 そうだよ。それで、この世に未練があって、しょっちゅう出てくんなら、やめてほしいよなあ。

徹 その写真が心霊写真だっていう証拠はないだろ。大体おれは、そういうのは信じないんだ。

男子 あ、そうか。川島のうちはキリスト教だったもんな。それじゃあ、幽霊なんて信じないよな。

徹 まあな。

ナレーション おれのうちは、母方のおじいちゃんとおばあちゃん、そしておふくろが熱心なクリスチャンだ。それで、小さいころから教会学校に連れていかれたりした。もっとも最近は、日曜も部活が忙しくて、めったに行けないんだけど。まあとにかく、心霊現象なんていう非科学的なことは、おれには信じられない。いくら自殺したからって、星山さんの霊がいつまでもフラフラしてるなんて、あるわけない。

男子 な、川島もそう思うだろ？

徹 え？（我に返って）何が？

男子 だから、死んだらそれで終わりだよ。その人の霊とかだけ、残るわけないの。

女子 じゃあ、死んだらどうなるのよ。死んだ人はどこへ行くの？

男子 そ、それは…。知らねえよ、そんなこと。消えちゃうんじゃないの？ 死んだら、体も心も、みんな消えてなくなっちゃうんだよ、きつと。

徹モノローグ 死んだら… どうなるんだろう。あいつの言ったとおり、何もかもなくなってしまふのだろうか。それとも…。ああ、分かんなくなってきた。昔、教会学校の先生に話してもらったことがあるような気がするけど…。おれがこの話題をこんなにも気にするのには、実は訳があった。

(効果音) (ドアの開閉音)

徹 ただいま。

母 あ、お帰り。お母さん、これからおじいちゃんの病院に行ってくるけど、徹、どうする？

徹 おれ… 今日はいいや。悪いけどパス。

母 そう。最近、あんまり行ってくれないじゃない。おじいちゃん、かわいそうよ。あんたのこと、特にかわいがってくれてたのに。

徹 分かってるよ。だけどさ、もう行っても、おれのこと分かんないみたいでさ、なんか、「だれだったかな」って言うような目つきで見るとだぜ。なんか、つらくなっちゃうよ。あれってさ、一度ボケたらもう治んないのかなあ。

母 おじいちゃんのはね、痴呆症ってわけじゃないの。薬のせいで一時的にボンヤリしているだけだって、お医者様おっしゃってたから。それに、人と会ったりして刺激を受けないと、ますますひどくなるらしいのよ。

徹 へえ、そうなんだ。じゃあ、そのうちまた行くからさ。

ナレーション おじいちゃんが入院してからもう3か月になる。風邪を引いたと思ったら、見る見る弱ってしまって、救急車で運ばれ、そのまま入院。それまで元気にしてただけに、本人も家族もショックだった。「やっぱりもう年なんだなあ」と思ってしまった。それ以来、病院に見舞いに幾たびに弱々しくなっているように見えて、何だか見るのもつらい。母さんにはああ言ったものの、見舞いに行くのは気が重い。もしかしたら、このままもう家には帰ってこられないんじゃないか、なんて思ってしまう。おじいちゃんも、もしかしたら、もう自分があまり長くないって感じているのかもしれない。おじいちゃん、怖くないんだろうか。そう言えば、小学生のころ…。

(音楽) (回想)

徹(小学生) わーんわーん。(思っきり泣き叫ぶ)

母 どうしたの、徹？

祖父 どうした？ 大丈夫か？

ナレーション あれは小学校 4 年生の秋。そのころ、まだ田舎に住んでいたおじいちゃんの家遊びに行くと、庭の柿の木に登り、夢中で柿の実を取っている時に、急に枝が折れ、枝ごと地面にたたきつけられたことがあった。軽いねんざだけで骨折もなく、大したケガにはならなかったのだが、その時おじいちゃんが話してくれたことが、なぜか鮮明に記憶に残っていた。

祖父 どうだ、まだ痛いか、徹？

徹 うん、まだちょっと。

祖父 しかし、頭を打たないで本当によかった。神様が守ってくださったんだな。柿の木っていうのはな、折れやすいんだ。それも、ほかの木と違って、一気にポキーンといくからな。気をつけなくちゃいかんぞ。

徹 うん。おじいちゃんも子供のころ、落ちたことあるの？

祖父 ああ、何度もな。そのたんびに、おじいちゃんのお母さんに、ひどくしかられてな。でもまた次の年になると、どうしても高いところの柿を取りたくて、懲りずに登っ

たもんだ。

徹 僕、もう絶対に登らないよ。枝がポキッて言った時、もう死ぬかと思ったもの。

祖父 徹にもしものことがあったら、お母さんもお父さんも、もちろんおじいちゃんも悲しむからなあ。

徹 うん。(間)おじいちゃんも死ぬかと思ったことある？

祖父 そうだなあ。おじいちゃんは、徹と違ってもう年だから、いつ病気になるか分からんしなあ。だが、おじいちゃんは、イエス様を信じてる。それで死んでも天国へ行けるから、安心なんだよ。

徹 怖くない？

祖父 そりゃ、病気やケガで痛い思いをしたりするのは、ちょっと怖いけどな。でも死んだらイエス様のところへ行くんだから、怖くないよ。

徹 ふーん。教会学校の先生も、そんなこと言ってたっけ。おじいちゃんは死んでも天国へ行けるんだね。

祖父 おじいちゃんだけじゃないよ。おばあちゃんだって、お母さんだって。徹も、イエス様信じれば行けるんだよ。

(音楽) (回想終わり)

ナレーション それから数日後だった。

(効果音) (校内放送のチャイム)

校内放送 (フィルター音)お呼びいたします。2年 B 組の川島君。2年 B 組の川島君。至急、職員室に来てください。

ナレーション 「何だろう？」そう思いながら、おれは職員室に急いだ。なぜか胸騒ぎがしていた。

<後編>

先生 川島、すぐ家に帰りなさい。自宅から連絡があった。

徹 はい。

ナレーション おれは川島徹。青春中学の2年生だ。ある日、授業中に呼び出されて急いで家に帰ってみると、書き置きがあった。3か月前から入院しているおじいちゃんの容体が、急に悪くなっただけじゃない。おれが病院に駆けつけた時には、もう意識不明の状態だった。それでも集中治療室の中で2日間頑張ったが、ついに3日目の明け方、静かに息を引き取った。付き添っていた母さんの話では、苦しみもせず、眠るような最期だったという。おじいちゃんはクリスチャンだったので、通っていた教会で、告別式が行われることになった。

(音楽) (BGM.葬儀用賛美歌)

牧師 今、私たちは、ここに集い、敬愛する故村越源三兄弟を天に送る式を執り行なおうとしております。兄弟は、この地上で82年間の生涯を送り、今、安らかに主

のもとに帰られました。主イエス・キリストを信じ、キリストのしもべとして忠実に人生を歩まれた村越兄は、私たちとともに教会に集い、同じ神の家族として、主に仕えてこられました。今、兄弟を天に送られたご家族のうちには、大きな悲しみがありましょ。私たちにしても、兄弟を失ったことは、大変寂しく、残念であります。しかし、キリストを信じる私たちにとって、この世の生涯を終える肉体の死は、終わりではありません。私たちクリスチャンには、復活の希望があるのです。…(FO)

ナレーション

もう、おじいちゃんはいないんだ。頭では分かっているけど、何だか実感がわいてこなかった。写真の中のおじいちゃんの写真は、今にもおれたちに話し掛けてきそうだったし、棺に納められた遺体の表情も、まるで眠っているようにしか見えない。「おじいちゃん！」と大きい声で呼んだら、起きてくれそうな気がした。だが、おれの隣でさっきからハンカチを目に当てて、しきりに鼻をすすっている母さんの姿は、おじいちゃんの死が現実であることを物語っていた。

牧師

それでは、ここで賛美をしたいと思います。村越兄は生前から、「自分の葬儀のときには、ぜひこの賛美歌を歌ってほしい」とおっしゃっていました。讃美歌312番「慈しみ深き」は、兄弟の愛唱しておられた賛美歌ですので、皆さんと一緒に…。(FO)

(音楽)

(BGM「慈しみ深き」)

ナレーション

賛美歌を歌っていると、何だかおじいちゃんが歌っている声が聞こえるようで、涙が思わずこぼれた。それにしても、まだ生きている時から、自分のお葬式に使う賛美歌まで考えていたなんて、知らなかった。おれだったら、自分が死んだときのことなんか、怖くて考えたくもないのに。おじいちゃんは、どうして“死ぬ”ってことを、そんなにもはっきり、正面から受け止めることができたんだろう。

牧師

それでは、聖書をお読みします。ヨハネの福音書、11章25、26節。「わたしは、よみがえりです。命です。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。このことを信じますか。」ここで「わたし」と言われているのは、イエス・キリストであります。しかし神様は、私たちを愛するがゆえに、ご自身の一人子イエス様を、人間の罪の身代わりとして、十字架につけてくださいました。そしてイエス・キリストは、3日目に死からよみがえられたのです。ですから私たちは、そのイエス様の十字架が自分の罪のためだった、と信じて悔い改めるとき、神様の前でもはや罪のない者とされ、永遠の命を頂くことができます。私たちの地上での肉体の命は、たとえどんなに長生きしたとしても、100年とちょっとで終わりが来ます。しかし、クリスチャンにとっては、死は終わりではないのです。やがて再びイエス様がこの世に来られる時、私たちはよみがえって、天国に住むことができ

るのです。天国は、苦しみも涙もない、素晴らしいところだと聖書に約束されています。ですから、私たちにとって、愛する者の死は、とても悲しいことですが、絶望ではありません。天国でまた再び会えるという希望があるのです。…

ナレーション

昔、何度も聞いたイエス様の十字架と復活の話だったが、今、自分の家族の死という初めての経験の中で、牧師先生の語る聖書の話が、何だかすごく身近な、自分に直接関係あることとして響いてきた。

その夜、告別式に駆けつけた親せきのおじさんや叔母さんたちが、うちに泊まることになった。

叔母(母の妹)

だけど、あれよね、お父さんも見事に何も残さないで死んじゃったわねえ。ずっと年金暮らしだったのは知ってたけど、もう少し財産あると思ってたんだよねえ。

母

そうねえ。何一つぜいたくはしなかったから。教会の献金だけは一生懸命、惜しまずにしてたけど、自分のことに関しては、質素だったわね。お父さん、“天国銀行”にいっぱい貯金したのね。

叔母

え、そうだったの？ だけど、その献金っていうの、ちょっともったいないわよねえ。随分と気前がいいじゃないの。ねえ、本当に全部、教会に行っちゃったの？ お父さん、お姉さんのとこにずっと一緒に住んでたから、なんかわたしたちに隠して、もらってたなんてことなあい？ ほら、東京に出てくる時に、田舎の家や土地、売ったでしょ？ あの時の…。

おじ(叔母の夫)

お前、いい加減にしないか。こんな席でそんな話。

叔母

あら、ごめんなさい。だって気になったんですもの。でも、あれよね、考えてみれば、財産なんていくらあったって、お墓ん中まで持っていけないんですもんね。いえね、去年ぐらいだったかしら、うちの近所で独り暮らしのおばあさんが亡くなったのよ。ほら、あなた、2丁目の柴田さん。

おじ

ああ、あの時な。

叔母

それがね、お姉さん、びっくりするような話なのよお。あたしたちも時々見かけるだけだったんだけど、アパートの一間に住んでた人でね、随分と節約してるような暮らしぶりだったんで、あたしたち近所の者は、てっきり身内のないお年寄りだと思ってたのよ。何でもなくなってから3日目に、隣の部屋の人がおかしいと思って、大家さんに言って、初めて発見されたんですって。

母

あら、お気の毒にねえ。

叔母

ところがよ、もう聞いてびっくり。タンスの引き出しに、1000万円以上も現金でしっかりため込んでたんですって。慌てて駆けつけた息子たちが、財産の分配でかなりもめたって話よ。生きてるときは、ろくすっぽ世話もしないでさ、ほっといたくせにねえ。その話聞いて、あたし、つくづく思っちゃった。人間てさ、最後はお金しか頼れないって思うんだって。でも、いくらしっかりため込んで、死んじ

やったらおしまいだもんねえ。それに比べたら、お父さん、幸せだったのかもしれないわねえ。

ナレーション

聞くとともに耳に入ってきた叔母さんたちの話には、おれはふと中学校の先輩、星山さんのことを考えた。先輩と言っても会ったこともない、20年も昔の中学生で、理由も残さず自殺したと言われている人だ。

徹モノローグ

星山さんは、いざ死のうとした時、何を考えたんだろうか。成績もよく、友達もたくさんいたという星山さん。でも、この世に何かすごく嫌なことがあって、死んで楽になりたいと思ったんだろうな。この世がすべてとばかりにため込んだお金にも見放されて、独りぼっちで死んでいったおばあさん。2人とも、「死は終わりではない」と信じられたら、もっと別の生き方ができたかもしれないのに。おじいちゃん、おじいちゃんはどうだったの？ どんな気持ちで死んでいったんだよ。

ナレーション

その時、ふと、小学生のころ、田舎の柿の木を見上げながら話してくれた、おじいちゃんの言葉が心に浮かんできたのだった。

祖父

(エコー) 徹、おじいちゃんだってな、病気やケガで痛いのも苦しいのは怖いよ。けどな、おじいちゃんはイエス様を信じてるから、天国に行けるという希望があるんだよ。聖書の中でイエス様はこうおっしゃってる。「わたしは、よみがえりです。命です。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです」とな。

ナレーション

おれは、あの時の穏やかな、でもきっぱりとしたおじいちゃんの表情を思い浮かべた。その顔は、さっき<sup>ひつぎ</sup>柩の中で見たおじいちゃんの死に顔と、おんなじだった。

徹モノローグ

そうか。おじいちゃんは信じたとおりに生きて、そのとおりに死んでいったんだ。

ナレーション

そう思ったら、おじいちゃんの生き方が、何かすごいものに思えてきた。

徹モノローグ

「わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる」か…。

ナレーション

おれは、心の中でそとつづやっていた。

<完>